

文藝春秋

出陣する學徒

十一月號

第二十一卷 第十一號

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
昭和十八年十一月二十日印刷
昭和十八年十一月一日發行 每月一回 一日發行

文藝春秋 (第二十一卷 第十一號)

特價 金四十錢

(送料二錢)

腦溢血

之以前驅する頭痛症
・頭重・眩暈・逆上

血行障碍を除いて
腦血流を圓滑なら
しめ頭痛症狀を輕
快せしめる。
……殊に
腦溢血に前驅する
頭痛症狀に有効
NO. 1001-1002-1003

ルロセル



社會式株藥製義野塩 城京・京東・阪大

虛弱 兒に!

許特法製

動物質有機性
磷酸カルシウム劑

新鮮なる動物の脊推骨
より抽出せる唯一の動
物質磷酸カルシウムなり
適應 肺結核・妊 娠
惡阻・カリエス
肋膜炎・授乳期
腺病質・腎臟炎

ルロセル

日丁二町廣敷區南市阪大 社會式株藥産畑稻 元資販

8489

文藝春秋

十一月號

編輯後記

町、江戸に置いて敢てあやしまないのが今日の史學界の常識ではあるまいか。此の長い期間に於ける天朝の御事は畏くも埋はれてたまになつてある有様ではないか。吹く風の目に見えれど世々の列聖は此のあめのしたを神ながらにしるしめし給うて來たのであり此の大本を正すことによつて一切の間違ひが正されるのである。國體明徴とは此の事にかゝるのであつて歴史觀の問題を離れて國體明徴を計らんとするが如き愚は速に改めねばならぬ。

○今回戦力増強の爲めの國內體制強化の方策の一つとして學生生徒に對する徵兵猶豫が停止され、適齡の學生生徒は理工醫科關係を除いて一齊に皇國の守りの第一線に立つことになつた。學生諸君はみことかしみ勇躍光榮ある任務に參じてあるのであるが、このことはやがて内から學問の性質を改めさせ正しい皇國の學を生み出す一大契機となる事を我々は信ずる。



☆先月豫告した海軍戦記第五輯「南太平洋航空戦」及び菊池寛編「航空對談」は種々進行上の都合で遅刊の止むなきに立至つた。御期待に反して何とも申譯ないが、今月の新刊として、北川桃雄著「斑鳩標記」(價四圓廿錢送料卅錢、弘報十一號掲載)を諸氏の机上におくり得るのを喜びたい。

☆天平の佛教美術を中心にして、我國傳統文化の精髓に觸れた著者一流の觀照と隨想集である。A5判A7ト寫眞十一葉を挿入し、眼に惚びながらの讀書の便とした。十一月月上旬發賣の豫定である。

☆農業經濟の立場からの時事的隨想集、大槻正男著「稻の花」(價二圓五十錢送料十五錢)は好評で品切中だつたが、再版の運びとなつた。「比島戰記」の普及版(價三圓送料廿錢)と共に十一月中には店頭に見られる豫定である。

昭和十八年 十月二十日印刷
昭和十八年 十一月一日發行

發行所 船田龍太郎
印刷所 花房滿三郎
大坂ビルヂング
東京都豊島区内幸町二-1
電話銀座座(57)
一五五五五六一
五五五五六一
五五五五六一
五五五五六一
五五五五六一
振替東京一七六〇三番

文藝春秋 普通號定價表

一部 五拾錢(送料二錢)
六部 參圓(送料共)
十二部 六圓(送料共)

○但し特別號は定價、送料共不同に付其都度差額を申受けます。
○御送金は成る可く振替貯金を御利用願ひ上げます。

本號 特價 四十錢
(東京二〇四) 本號送料内地、十六錢

東京都小石川區久堅町一〇八
印刷所 共同印刷株式會社
東京都神田區淡路町二丁目九
配給元 日本出版配給株式會社

隨筆

御陵について……………比企修(三)	殘具抄……………彌富破摩雄(四)	民具の文化……………宮本常一(五)	真町の勇者……………椎名龍徳(七)	機能の若さ……………西川義方(九)	時局と音楽……………瀧田琴次(三)	私と日本……………陶亢徳(三)
-------------------	------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-----------------

思想謀略と神代文字……………植木直一郎(六)

出陣する學徒へ……………田中忠雄(二)

學徒の誓ひ……………酒井利行(三)

正史と國史觀……………房內幸成(六)

熊野拾遺……………今春聽(杏)

實朝の死……………谷馨(三)

維新文學の開花……………森本忠(杏)

六號記專

短併演映誌出	歌句劇畫口會	耳會	常會	春秋
(四)	(四)	(八)	(九)	(九)
(二)	(二)	(二)	(二)	(二)

土地改良……………丸山義二(三)

全坑一心……………岩崎惣次郎(四)

國民體力と都市文化……………古屋芳雄(四)

日本の飯……………橋浦泰雄(四)

話の屑籠……………菊池寛(四)

文藝春秋……………伊藤藤廉
編輯後記……………(三)

融雪期……………儀府成一(三)



出陣する學徒へ

田中忠雄

昨晚、在惠徴軍延期の停止について、と題する陸軍省兵備課長の放送演説を聴きました。あの演説の中に、親愛なる學徒諸君、といふ呼びかけの言葉が二三度あつて、それが小生には堪へ難いばかり切實に響いたので、日頃親しくする幾人かの學生諸君も、多分それぞれの場合で靜かにこの放送に耳を傾けてゐるのだと思ひました。

遠く睡れてゐて君とは直接に話を交す機會も望み難いかと思はれますので、今夜の暇を利用して、御出陣を祝ひたく、かくは机に向つた次第です。

何よりも先づ、おめでたう。殊に君は、學生生活といふものに一種の焦躁を感じて居られた。米國の一大事に際會して、このやうな生活で一體いものであらうかといふ氣持から、いまだ十分に抜け出ることが出来ない、と繰返し歎いて居られた。それが、近くお召

を受ける身とさだまつては、ながい間の鬱勃たるものも一舉に堰を切つて迸る思ひでせう。君の勇躍する姿が見えるやうです。

小生は君の性格については、相當に深く理解してゐると信じたので、君の焦躁や歎きに對し、幾分警告の意もこめて良心的といふふうに申したことがあります。專攻の學問に、まことに身心を打ち込む道は、君において未だ開けてゐなかつたやうです。さればとて、その學問にしみ附いた洋意をさらりと捨てるだけの體身の勇がわき出るには、なほ重大な難關が横はつてゐるやうに見えました。いきほひ、學者や學友の言ひ甲斐なき態度を憤り罵るやうな言葉が多くなつたわけです。それは、本當は良心の焦躁とでもいふべきものだつたのでせう。

は際限のないことでした。今日、大學で講ぜられてゐる學問が、すべてみたまわれの生命に直通する搖ぎなき地盤をふまへてゐるとは何としても言ひ難いものがあります。文科系統の純真な一學究として、一たび皇國の純粋な道に志した以上、その情熱を專攻の學の中に燃やしきらうとするのは當然の要求です。しかも、それが容易に出来ない。出来ない理由は、學の性格と學者の實際とが自己の求める世界にびつたりしないからだと思はれるのでせう。これに對しても、同情したら實際きりのないことでした。

併し、小生はさういふことには一切共感しないといふ態度で君に對して來たのです。君はもう二十歳を越えてゐるではないか、維新の先人が奮起した年配を思へば、そのやうな甘い憤りや浅い歎きは、とつくに通り抜けてゐなければならぬ。生涯を賭けて悔ゆること

のない仕事に、そろそろ根をおろして然るべきときだ。今のうつつに正師に逢ひ難ければ、すみやかに首をめぐらして先人の學と靈に赴け。すると、われらの思ひが如何に淺く、われらの憤りがどんなに他愛もないものであるかが、昭々乎として明かになるだらう。恥ぢよ、恥ぢよ。わが生命の淵源と實歸との場において、わが學問を生きていることの出来ないのは、周圍に入なきためでもなく、環境の悪しき故でもなく、まことはわが慕古の志の至らざるに依る。——これは小生が絶えず自分に言ひ聞かせる言葉でしたが、君に向つても自然にさういふ態度にならざるを得なかつたわけです。

其の後君は、專攻の學にかかはりのあるなしを暫く問はず、皇朝の古典とこれに隨順した古人とを學び、随分と勵まれたやうです。たびたびお會ひする機會もなく、その成績を十分に承り得ないのは残念の極みです。尤も、時折のお便りや進境の様子は大體承知して居ります。とも角も、良心の焦躁を漸く抜け出て、只今のこのうつつ身に皇國の道にたつたる學の世界が開けようとする折、剣をとつて起つべき光榮の日が、思ひのほかには早く到來したのではありません。

良心といへば、つひ最近かういふことがありました。高等學校の三年生ですが、先日訪ねて來て何かと雑談のついでに、彼は言ふのです。自分は射撃部の主將をしてゐるが、昨年は〇高との試合に敗北した。この夏はその雪辱戦で、こちらから出かける番になつてゐる。ところが、對校試合は今年から全國的に禁止になり、特に文部省の許可するものだけが認められることになつた。幸に自分らの遠征は許され、近く出かけるので猛練習をやつてゐる。然るところ、選手の一人が言ふには、今われわれが出かけるのは、よろしくないぢやないか。ほかの學友は全部勤勞奉仕をやるのに、われわれだけ試合に出かけるのは心苦しい。且つまた列車の混雑といふこともあり、幾分でも旅行をさし控へるのが本當ではないか云々。その男の考へは、なる程一理あることだと思ふが、併し、それだからと言つて遠征を思ひとどまることは出来ない。また、その男の考へ方に、何か同感出来ないやうなふしも感ずる。どういふものでせうか、といふのです。

小生は、その學生の考へ方には何處かキリスト教的、殊にプロテスタント的な良心の臭ひがする、さういふのは日本の血脈の中には

決してないものだと云ふたのです。彼は、はたと思ひあつたといふ風で、あの男の家はたしかにキリスト教ですと言ひました。尤も、その人が實際にキリスト教徒であるかどうかは別として、彼の考へ方自體は、明かに米國ふりとちがふところがあると思ひます。それについて、君にくだくだしく書く必要はありません。ただ、そのやうな良心的感覺や道理の感覺では、このみ軍は戦へないといふことに注意させよう。第一、主將たるものが雪辱を決意して練習を始めたのに、その部下にあるものが、一體それは正しいか正しくないかといふふうな普遍的な形考へ、それに照らして自己批判をやるといふ習性には、少し可笑しいところがあります。さういふ習性を養ふたら、人は上官の命令についてさへ是非善惡の思惟をめぐらし、然る後にこれに従ふか従はぬかを決めるやうな兵士になるでせう。そこまで墮落することは先づあり得ないとしても、一刻を争ふ戦陣の行動に、わづかの躊躇が入り込んで、それがやがて勝敗の決となり得るのです。軍人勲論に、下級のものは上官の命を承ること實は直に朕か命を承る義なりと心得よ、と仰せたまひし御聖旨に沿ひ奉ることが出来ませう、日夜に

の身心を研ぎ洗ふ學問が必要とする。

併し、理想ではとてもその男にかなひませんと云ふのです。多分さうでせう。かやうな場合こそ、主將たるものの貫録と力量とが明かになるでせう。ああ言へばかう言ふ調子の辯證が續いてどうしてもやまないなら、まあ骨の一つも食はずよりほかないで、主將とわれわれは笑ひました。主將たるものが確固たる態度を持してをれば、つまらぬ問題を並べるものは出ない筈で、右のやうな問題は自己のどこかに隠のあるところから起ると思ふべきです。僅か數名のものが出かけるのに、列車の混雑といふやうなことから批判するの、この場合少し大げさに過ぎるし、當局の許可したものを、さらにゴツドが許すや否やと内証させるのも變だし、なほまた、學友の勤務奉仕中に自分だけまぬかれるのは心苦しいと思ふのは、射撃をやつてゐる自己の使命に少しも信念をもたない證據ではありませぬか。

西洋ぶりの附屬した學風は、最も良心的な場合でも學徒を驅つて、かやうなところに追ひ込むので、小生など拙い身心ながら、黙つて見てはをられない理由も、端的に申せば、それは戦へぬぞといふことにあるのです。

と思ひます。これは決して卒伍だけのことでありませぬ。文明開化は、身體を樂にして能率をあげようといふ精神ですから、その時以來教育に身學道の魂が衰へて行つたのです。それが一番のなほなほであつたし、今なほ一番のうらみです。召されて皇軍の一人となられることは、この衰へたものを回復するといふ點でも、學徒として重大な意味があります。昔とちがつて軍事教練は餘程真剣になつてゐるでせうが、それでも兵營の生活とは矢張り身學道の覺悟がちがひませう。いくさは、身を以て刻々に判断することを迫るものでせう。判断が生死のことにかかはるわけですから。一般の學校では、さういふ判断力をあまり練磨しなかつたのです。

或る文科系統の研究所に勤めてゐる小生の友人が、今の學問や研究に携はるものは、多かれ少かれ皆引き延された生活をしてゐると言ひました。身心を學して當れば一ヶ月で成就し得るやうな仕事を一年間の研究題目として精緻を講ず。だから、その日々は引き延された生活であります。講義なども一年二年と續くけれども、中には引き延された講義があり、その聴講者は知らぬ間に自主的の性格を消滅するのです。第一義の重大事について

國史的立場に對する世界史的立場の優位なことを唱へ、世界史的立場の内的要求に合致するかどうかによつてわが國が世界史的の法廷で裁かれるやうなことを言ふのも、全く同様で考へ方で、それはとても戦へないので。ゴツドの代りに世界史的立場をもつて来ただけのことです。自分で勝手に作り上げた立場を鑑として、兩國をも照し出さうといふのですから、臣たる身分を忘れることにならざるを得ませぬ。射撃部の選手が部下たる自己を忘れて、ものを言つたと同じ事です。

人類一般から割り出される道義などといふものは、このやうに他愛もない凸凹だらけの鑑なのです。さういふ鑑を携提して歩き廻つてゐるその學生などは、今度入營したら、恐らく骨の隨まで打ちのめされるでせう。軍隊は皇國のますらをの集るところですから、そんな尻窟は全然通らないのです。全局を見る叡知も、忠諫をなす節義も、身分を忘れた辯證の才能から生るべくもありません。

今年の正月に歸省した時のことです。高等工業を出て入營してゐる兵隊さんが、外出を許されてわざわざ訪ねてくれました。いろいろ軍隊生活を語つた末に彼は言ふのです。こ

は、なかなか斷定せず、倦むことなくその周邊を歩き廻る。ともすれば、それが學問的嚴密性と勤ちがひされるといふわけです。

法經文の學科は、或は經綸の學として、或は一國の文教を擔ふ學として、それぞれ第一義につながるものでありながら、右のやうな判斷延期の形で、だかららとしたものにもなり得るのです。理工科や醫科は、對象が歴然と目に見えるものであるから、假令瑣末な事柄でも、とも角も自分で判斷し自分で行はな

いと物が動かぬし、結果も出て来ない。さういふのつびきならぬものが、一つさしつけられてゐるので、實驗一つするのでも判斷延期といふことは出来ない。間違つてゐたら、多くの場合結果としてちやんと現れるのです。法經文の學は、國の生命にかかはる大事なものであるから、それだけに、わがうつそ身の肉眼には見え難いのです。ひそかに緩和したり胡亂化したりすることも、一時は可能だし、また邪路に陥る危機も深刻です。ここでは、神々に賜はつたわが心眼を見開くことが一大事となります。入りて相となるべき材も、一國の文教を擔ふ材も、ここで培はれねばなりません。明治天皇が大學に行幸あそばされて、入りて相たるべき人物を養成する

のあひだ戰友と一緒に寒風の吹きすさぶ野原で石の上に長い間坐らされた。何のわけだか全くわからない。はじめの程は不當だ不當だと心に反抗しながら我慢の辯證をやつた。だといよいよ苦しくなると性も張りもなくなつてふと氣付いて見ると、まるで子供のやうにお母さんお母さんと心のうちに叫んでゐた。かやうやつて僕等の合理主義的な我慢を退治するわけだつてと沁々した口調で話すのです。軍隊に入ると誰でも親孝行になるといひます。

實際、それは理不盡でも何でも無い。何も特別に悪い所行があつたから罰を課したといふわけでもなからうけれど、上等兵殿の目で見ると、その顔附きや身のこなしでは到底戰場に立てぬのでせう。だから嘗て自分が鍛練された通りに、今度は新兵たちを鍛練するでせう。お前らは生意氣だからと言つて、寒風に坐らせた上官は、かつて自分もさういふ教育を受けたに相違ないのです。非常に氣まぐれて突發的な命令のやうでも、ちやんとその人の承け繼いだ教育の傳統があるわけですから。さういふところにも、いはゆる身學道の精神があると思ふのです。

身學道がなくては、結局ことを爲し得ないし、わけてもいくさの處に立つことは難しい學のなきことを御救きあそばされ、維新の材なきあとについて御軫念あらせられたことは、畏き極みであります。お召に應ぜられるといふことは、かの引き延された生活と、きつぱり訣別することだと思ひます。その訣別の身心を誦して學にめぐらしきたるとき、皇國の學問はまことの面目を發揮することです。散りて甲斐ある身となられるのです。

大木惇夫氏は、多分御存じのことです。一昨年十二月大詔演説の直後、徵用令を受けて應召し、大東亞戰爭に参加された詩人です。時に四十八歳、辛うじて新兵の訓練に耐ゆ、と書いてをられます。文藝日本九月號にその日、と題する一篇を寄せられました。大みことは降りたり、

召されたり、うたびと、われが、こは、げにも夢にやあらぬ、國生みのためみいくさに命知る齡にちかく、瘦せほそる弱き身にして召されたり、ああ、召されたり、今ぞ知る、われは男の子ぞ、げに生きてかひあるものぞ。

よはひ知命に近くして召されるの光榮を擡
うた氏の、魂の深い震慄を思ひませう。過ぎし
日の幾日夜は、世を憂へ人をあざみて、干
す酒も悲しかりしか。そして、さらさらぬ生
きのこの日に、召されたりよくもこの身と云
ひつつ、勇躍出陣の時のわが姿を思ひ出て

たちまちに變るすがたや、
裝ひの身につかずとも、
なまぬき、われは恥ぢぬを、
細腰に太刀は佩くとも
そを使ふすべだに知らぬ
かりそめの、俄かづくりの
かなしかるこの軍びと

召されたりこもる決意の深さが、かな
いまで迫つて來ます。
召されたり、うたびと、われは、
おほらかに死所を得たり、
たらちねの御墓もゆるげ、
召されたり、召されたり、あな。
「その日」が、やがて學徒われにも、めぐつ
て來ました。しかも、このわれは佩く太刀を
かねて研ぐところありし若人です。氏の沈痛
はなくとも、われに運天の志氣ありです。わ

なかに及び難いものです。大君に捧げあま
し吾がいのち、といふ言葉が沁み徹ります。
それまでの先生の千辛萬苦の御いのちを心に
しめて、子々孫々に語り傳へたいものです。
かやうなことをしたためるのは、今こそ捨
つる時は來にけりてふ道は、無限に深いとい
ふことを言ひたかつたからです。
小生の友人が今度南方に行くことになり、
心ばかりの送別會を催しました。大變に優れ
た人で、かねて尊敬する畏友です。彼は公の
仕事の上で難關に逢着し、これを透過するに
は非常の決意を要する破目になつてをりまし
た。小生は、ひそかに彼の身心に生涯の一大
轉機が來たと考へてゐたのです。そこへ、急
に南に行くことになりました。この人物は、
必ずや南方で立派な仕事を成しとげることと
存じ、心から祝ひました。ただ、ふと小生の
頭をかすめた感じは、彼の内部に塵ほども
何かはつとしたやうな心持ちが動いたとすれ
ば、本當に残念なことだといふことでした。
道も道への挺身も無限に深いものです。職を
賭すことは出來ても、いのちを賭することは
は難しい。いのちを賭することは出來ても、
一族のいのちを擧げて忠に殉ずるといふこと
は、思ふだに難中の難です。國臣先生が

が渾身心を、いまこそ捨てる時が來たので
す。まことにまことに、その日のための生て
あり、その日のための學であつたのです。
小生と一語に古典を讀んで來た一人の若人
は、猶豫停止の發表があつた翌日やつて來て、
何時ものやうに本を開きました。いよいよ出
陣だねと言ひますと、彼は、はあと一言だけ
て、下調べの手帳を擴げ、靜かに讀みはじめ
ました。その時は神皇正統記で、丁度
聖武天皇から 稱徳天皇の御宇です。小生
は、篤胤の俗神道大意に出て來る行基のこと
を語り、彼は續日本紀によつて、この御代に
あつた心にくきことどもを論じました。私ど
もは、これ一夜を更し、その他ことは何も
語りませんでした。

思ふに、彼はもうちやんとした人物です。
今年大學の國史料に入つたばかりですが、小
生のところに時折來るやうになつて早くも三
年になります。小生などのやうに、曲折した
邪路や迂路を經ず、滿洲事變以後の日本の中
て學して來た若人ですから、何處かすつきり
したところがあつて、時折はじつと見惚れる
やうなこともあります。實に有難いことと
す。この點、君に對する時も同じ感じて、小生
は時々やるせない程に羨ましくなるのです。

吾がこころ岩木と人々思ふらむ世のため捨
てしあたら妻子を
と詠まれた御心は、實に實に容易ならぬこと
でありました。
眞木和泉守保臣先生が、楠公の大精神を關
族殉忠に拜され、關門義に死してその轍を踏
まん、と書かれたのは、いまだ召されざるに
起ち、いまだ召されずして吾が身、吾が妻子、
吾が一門の身を悉く挺しようとの悲願である
と信じます。先生は、その悲願をまことに貫
き徹されました。
わが身の上にひたと押しあてて、これを思
ふとき、今こそ捨つる時は來にけりの道、不
惜身命の道の容易ならぬことがわかつて來ま
す。劍をとつて、まつろはぬ醜の奴を撃つ千
辛萬苦の折にも、これらの先人の及び難い道
を絶えず學するならば、そこから新なる國ぶ
りの難ごころが滾々としてわき出ることを小
生は信じて疑はないものです。
不惜身命なり、但惜身命なり。いふ意味
は、不惜身命の極地に立つて但惜身命を學す
るのです。もう直ぐに出陣されるのです。出
陣の前にも後にも、どうかこの言葉を銘して
下さい。但は、ただし、ではありません。た
だ、です。ただ身命を惜むなりです。

ただ、今なほ殘つてゐる國籍の曖昧な學風
に對しては、せめて親しい幾人かの若人だけ
でも、飽くまでそれに染むことのないやうに
譲つてあげたいと思ひつづけてました。小生な
どがして來たやうな自己洗淨の苦勞を再びす
る必要はないのです。小生などが漸くにして
辿りついたところは、結局あたり前の平凡な
道に過ぎませんでした。ここを却つて出發點
にして、小生などの屍を乗り越え、ずんずん
進んで行く力量は、まがふ方なく君達のもの
です。少し老人くさい口調になつてしまひま
したが、このやうにすつきりした若人達が、
大君のまけのまにまに不惜身命する姿を思ふ
と、感激に五體のふるへるのを覺えます。
老人ぶつたついでに、もう一つ小生のやむ
にやまれぬ老婆心を附け加へさせて下さい。
平野次郎國臣先生の歌
大君に捧げあましし吾がいのち今こそ捨つ
る時は來にけり

この一首は、たしか文久三年の作です。天忠
組の義舉に際し、先生は鎮撫の特使となつて
行かれたが、志士達の聴くところとならず、
先生みづから呼應を決意されることになりま
す。この國ぶりのみ歌は、その頃の作と思は
れますが、この悲痛と歡喜との架きは、なか

或る先達の教示をお傳へ致しませう。――
弟橘比賣ノ命の白したまはく、妾御子に易り
て海に入りなむ。御子はまけの政彦けて、覆
妾まをしたまふべし。このときに倭建ノ命
は、最愛の后が菅原八重、皮疊八重、總疊八
重を波に敷き、その上に身を投せられるのを、
じつと權へたましたのです。後の言はれたや
うに、命には覆妾まをすといふ重い使命があ
りました。最愛のものの死をまのあたり見る
のは、みづから死するより遙かにつらいこと
でせう。子をもつ小生なども、その悲しさは
よくわかります。倭建ノ命は、悲しみに墮へ
て、ただ身命を惜みたまうたのであります。
但惜身命の道は、實に命にその骨髄を仰ぎ奉
るのです。
ゆくゆくは皇軍の幹部となるべき御身であ
りますから、特にこのことを書いた次第で
す。使命の重いだけに、不惜身命は徹して但
惜身命となるの要があるわけです。ここに至
つて、進退の自在も得られ、見の處し方も完
きを得ると信ずるのです。もとより小生など
は、とてもこれを確乎と申し上げる資格がな
いものです。ただ、皇國の歴史は身の處し方
にありと言ひ切つた尊敬する一友人の言葉を
思ひ出しつつ、かくはしたためるのみです。



學徒の誓ひ

國學院大學生 酒井利行

「うちの生徒は、人生廿五年と申して居ります。思はず振返つた。背後の椅子に中學校長風の三人連れが雑談を打ち交はしてゐる。さうだ、「人生廿五年」これこそ俺にそっくり與へられてゐる言葉なのだ。狭い頭の中を馳け廻つてゐた母、學問、學問、死等の思ひが一時に拭ひ去られていつた。折から汽車は濱名湖を走り白い鷗はブイからリギンへ、リギンからヤードへ忙しうにかけ巡る。お、あの姿こそ、もう二、三ヶ月もしたら：私はそののきを感じながら、何時迄も鮮かな「翼」を眺めやつた。

海軍豫備學生の志願票を提出してから、直ぐ歸郷した。母に報告少々許可を願ひに。私の突然の口土産が齋らす母の面影を随分いろいろと想像して家路を踏んだのであるが、母は靜かに、「しつかりやりなさい」と唯一一言の言葉を送つて呉れた。「酒井家は絶對

亡びません。靖國神社がある限り、空に飛行機が飛んでゐる限り、第二人も早晩母の膝下を飛び立たうとしてゐるのを始めて知つた自分分は、せめて末弟だけはと酒井家にかこつけながら申したのであるが、すべて子供任せの母であつた。私は二階にかけ上つて、無我夢中に階下の母に合掌した。お母さんの體一杯に無限の涙がたゞへられてゐるのを知つてゐる。母はそれを僕の前では危く堪へ切つてゐるのだ。皇國が、事ある毎に繰り返されて來た家庭個々の悲劇が、今、自分の家にも演ぜられてゐる。第一義の、純な明るい、ひたむきな悲劇である。センチな、憂鬱な、エゴイズムな悲劇、喜劇に對する所謂悲劇を云ふのではない。

かうした館山中尉母堂らの氣持は又僕の母の氣持である。或ひはそれ以上であると信ずる。母の涙も見まい、自分の弱い口振りも聞かせまいと匆々に再び汽車に乗つたのである。多少神經質な自分には、動もすると物事を過想視する。車中ではとりとめもなく、今迄の、そして今の自分を考へ、周囲を考へ、死後を考へた。そして結局與へられた言葉が彼の一中學校長の「人生廿五年」であつた。正に天來の覺悟であり、自分の辿つて來た歴史への宣言であつた。さうだ、今自分は、此の決意の一點より新しく出發せんとする。「みたまわれ」の覺悟に感泣しながら、暗迷の心に輝かしい鷗は射し込み、生と死の紛争はこれからのひたむきな觀望に依りすつかり解消せしめるのだ。

られない野中で、清楚な花を心一杯に咲かせて散つて行く、その姿にも美と聖の至極が見出されはしまいか。

大君のみことかしこみ磯にふり海原渡る父母をおきて母刀自も玉にもがもや頂きて

一體人生とは何んであらう。五十年、七十年の故に貴いのか。名もなき民草が、人の知を投じよう。七生報國は自分の最も信念する所である。二十餘歳の生涯が一度終りを告げたとして、直ぐその酸成ひされた清新の身體で生き變り再び國學の門を衝くのだ。私が學問の敗退者と見られ、苦業の回避者と見られるならば、寧ろ此の面を凝視してこそ云ひ得る所である。

「苦しい學問の道を回避するのか。君は人生の敗退者だ。或る友は、私に眞心をもつて斯く忠告した。私は何と云はず甘受した。人生の敗退者、卑怯者、從來私は身ぶるひする程此の言葉を恐れて來たのであるのに。友への解答は、あの空の決戦場でしょう。他日、友の征衣上途の日にこそ私の氣持も本當に判つて呉れよう。斯く思ひ、斯く慰めて友に多くを語らなかつた。

國史の流れが此の身内にも脈打つてゐるのを感じ、自分の息吹が遠く御祖、神々の息吹であることも知つてゐる。然し、感じ、知ると云ふのも實は甚だ淡い程度のもではなからうか。觀念上に於いてのみ知覺ではなからうか。死を口に唱へ、勳皇を誦し、士人の自負に生きる。之等は平常無事の時にのみ發せられるたはごとくはなかつたか。犬の遠吠え、藥の效能書ではなからうか。「命もいらぬ。名もいらぬ。金もいらぬ」とは雲泥の差をもつた似而非言ではないのか。反問し追究する時、私は自己の立場、地盤の貧弱に惱まざるを得ない。即ち、學問する身體の衰れさを知るのである。俺は戰場に於いて生き直らう。假令、現身は粉砕さるも永遠の生の流れに身

私に豫備學生志願の動機はかうであつた。問はれる迄もない、答へる迄もない、たゞ止むに止まらない氣持。今迄自己中心に物事を惱んで來た自分には、かうしたひたむきな、純な氣持が何か疑はしく感ぜられさうだが、どう考へて見ても、心を洗ひ去つて見ても、後に残るものはたゞ此の一途な氣持のみであつた。

ある。直接現象的面にのみ眼を血走らすのではないが、武器とる戦の危機に直面して、先づ自分は武器とる戦の人とならねばならぬ。此の未曾有の危機を赤裸々に表現してゐる南海の航空決戦、私の思ひはどうしても其所に走らざるを得ない。日毎夜毎水盃をして涙々とし難に赴く勇士達。人が足りない。無論飛行機も足りない。然も一言も救助の聲を銃後に送らない。却つて銃後に感謝しつゝ前線は吾等の手と暫くする。十七、八の少年がゐる。あのハワイに行進した友の冥福を祈る同輩がゐる。吾々ふるさとの同窓がゐる。幼な子を産した幾多先輩方が居られる。可憐な少年達に、年長けた方々に、危機の負擔を凡て負はせきつてみてよいか。他國は、敵國は既に青年學生の總進軍をしてゐる。省みれば吾々皇國學生のみが保護と恩恵に浴して學び舎にいそむ。この國家の期待と、自己の立場を考へる時、吾々は思想戰士としての重きを思はざるを得ないが、斯く與へられた任務の重大さを考へる以上に、一步踏み込んで自分自らの本然のさゝやきに耳傾けねばならぬ。自らの本然のさゝやき、否、叫び、それは誰しもが持つものである。

何時であつたか、或る雑誌に一教師の手記として現今の學童のひたむきな心の状態が誌されてゐた。國史教科書を讀く。倭建命の熊襲艱夷変除行。この學童にはそれは單なる過去の歴史の事實ではなかつた。今に於いて命を見、三重の村を御杖つかして病體を運ばせ給ふ御痛はしさに涙するのであつた。「何故、當時の人々は知らぬ顔してゐたであらう。年若い命様にのみ御苦勞かけて、何故自ら起つて御援けしなかつたであらう。大事な命様を死なせてはならない。もし僕達だつたら……と、いたいけな真心、をのく筆とつて作文を綴るのであつた。私はそこに崇高を見た。そして次代の若者に、吾々の夢みたる日本の眞新しい姿を認めた。假令、危機の本質を知らずとも現實の緯相に歯ざしりする一本氣が貴いではないか。これこそ、誰しもが持つ本然の叫びではなからうか。それを嘯み殺して偽悪者にならうとするのか。アツツの玉碎を讀へ、ガダルカナル島の轉進を偲ぶもよからう。が然し、その讀迎讀讀が彼の橋驕覽をして憤らしめた「死眼人」のものであつてはならない。口に大事を唱へる醉漢が今尙夜のベンチにねそべつてゐる。不夜城の如き麻雀の集窟に紫煙に包まれて若者が蟠居してゐるのを見

る。いら立つ神經を抑へて、自分はあゝした時局を外の太平樂が羨しくさへ思つた。何時か大波は彼等を洗ひ去る。モンドリ打つて彼等は這ひ出して来るであらう。自分はその大波の一つとなればよいのだ。もつと自分の周囲を見つめて見よう。友のあの忠告が又響いて來さうだ。確かに、死を撰んで今の軌道を外れることは容易であり無責任である。隠れた國學戰士として荆棘の道を辿り、神代からの命脈をさぐり、源流を汲むことは安易な業ではない。特に吾々が選ばれた國學の徒であるのに思ひを致す時、國民の尖兵として、狼火の捧持者として敢然挺身するの任非常なものがあるのは云ふ迄もない。が然し、紙一重隔て、觀念に墮する危険が隨所にひそんでゐないか。動もして吾々は國學の美名に酔うて、脚下照顧するを忘れてゐる様なことはなからうか。神典を小鵬にし、國學の道統を論じ、任務の重大を筆にする。國學徒とは單にこの様なものであらうか。學園から菓立つの日を待ち、只管な學究を續ける者の辯として或は許されもしよう。然し自分は不満である。國學の歸結は實踐である。國學の理念は活動である。過去に於て吾々

は國學者が志士であることを知つた。國學者ならずとも凡ゆる階級、職に身を置く人が總て志士である時にその人は永劫に生きた。何故吾々が此の永劫の生に生きてならないのか。今のまゝで、學業も半ばに、ノートを棄て、立つことが卑怯であり、學徒としての敗退者の姿であるとは思はれない。十の力を他日發揮し得る人が、二か三の現有の力を一杯に捧げ盡すのも又比較計算を許さない貴さがないからうか。

こゝに一人の若き學徒が散策する。將來を囑目され、自らも迫る學に狂ふて晝夜を別たず精進してゐる。眼前に溺者あり。必死に救ひを求めてゐる時、彼は果して自らに反問し、自らの價値をあの溺者とブラスマイナスして見るであらうか。彼は身の危険を忘れて一心に飛び込んだに違ひない。泳ぎ一つ知らぬ彼であり、共に水底に沈んでいつたとしても、その悲劇から限りなく貴いものが發散して來るのだ。彼は學の勇者である以上に道の勇者である。學の昇華が道の實踐として現はれたのである。

本格的釀造
トミール
モルト
ウヰスキー
赤樽 白樽

六
さくらフキルム
さくら印畫紙
小西六富眞工業株式會社

これが特徴！
ヘリコイドレバーを移動させて鏡筒の先端レンズ部を伸縮させて集光調節する。
コーラックス
プロニー
12枚
F3.5, 1秒
1/200
定額税別
214.42
製造元 木光精密光學製造所
發賣元 木光商事合資會社

さうだ！ 神話の建設！ 學徒兵が

國の退立つ處、青雲の靄く極、白雲の壁り坐向伏す。青海原は樟葉干さず、舟の體の至り留る。大海原に舟滿ち都都氣て、陸より往く道は荷の絡纏ひ堅めて、磐根木根履み佐久彌て、馬の爪の至り留る限り、長道間無く立ち都都氣て、狭き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打掛けて引き寄する事の如く。と唱へ續ぎ、行ひつぎて行く時に、言葉は活動し、祝詞は復活し、世界は難新さる。

自ら天沼矛となる時に、國生まします神の御尾前にこよなく御仕へ奉ることが出来、かくて、吾々は古事記の新しき生成者、建設者となるのである。

益良夫の悲しきいのち積み重ね
積み重ねつゝ守る大和島根を
吾々は神話を建設して行くのだ。若きいのちをつみ重ねつゝ重ねて、永劫に。一字にも吾々の血肉が盛られ、一句にも吾々の魂魄が籠る。かゝる嚴肅なものが神話であり、國の聖典であるべきだ。既に吾々は、簡潔然も雄美なる「感狀文」の中に神話を認めだ。あの紙面ににじむ幾多戦士の血涙にひれ伏さ、その美とは表現を超えたものである。かゝる

決死の行ひこそ美の本質でなからうか。作戦要務令、あの小冊子の中に幾千幾萬の英霊が在りますことであらう。炸裂する砲彈の叫び、天地を響くす戦聲。否、々、々、

「天皇陛下様萬歳」の生命豪邁の唱喝が、幾そ度捧げられてゐることであらう。古典とは、神話とは、かゝるものであり度い。「死闘人」が文字と知識に於いて古典を口にするに反し、吾々の古典こそ、文字を知識を遺して、かゝる絶對に超えたもの、行ずるものである。

君のため世のため何か惜しからむ
捨て、甲斐ある命なりせば
錦旗打立て、白雲去來する伊那の峻峻を踏破された悲願の皇子、宗良親王、この南朝の皇子様の御歌をそつくりそのまゝ讀み歌ひ編めるのが無上に喜ばしい。

「學徒出陣」それは素晴らしい世紀の響きではなにか。友は國學の研鑽にいそむ。はやる駒の響を抑へて。若人の出陣はたゞ時の間題のみである。先鋒を受け賜はつた自分は、考へて見れば抜け馳けてあり、無責任であるかも知れない。敗退者、卑怯者、この言も當つてゐるかも知れない。が然し、僕は今度こそ身血の凡てを以て戦線より學窓の友々へ、研究報告書を送らう。それは文字なき、形な

きものであるかも知れぬ。けれど、何かに於いて友の宛事を授けるであらう。さうすれば僕の「學徒兵」としての死も、あながち無意味ではなからう。

「勝利なくして建設なし」明大の山崎君は斯く叫んでゐた。勝利の中から輝やかしい神話が出来、建設が生れる。危機に立つ若人は、敵者と勝利の決戦を交へるのみである。友のグループを振り切つて明日の出陣を待つ自分も亦かく叫ぶのである。

過去の自分は戦争を傍觀し、今の自分は我が身に、大東亞戦争を持つ。思へばか弱い自分ではある。が自己の中に國家の存亡が存し、玉の御座を賜はり居ることに思ひを致す時、千萬の軍なりとも如何ぞ我往かざらん。死は鴻毛の輕きにありとは云へ、必ず邦家を富強の安きに置かん。

去ぬる日、母に決意を披瀝して上京の途すがら自分は斯く、おもひを述べた。
一人身の母刀自置きて天翔り
い、征かんわれぞのどには死なじ
それは、
天朝のとはの御楯と男の子らは
いざ征きませと宣りし母はも
に報いたかつたからである。

朝日東亞年報 第二十八號
★朝日新聞社編★
新 支那戰時經濟の分析檢討を中心として、我國内決戦體制の確立と反側軸の矛盾對立を指摘し、以て對支新政策、南方建設に資する嗜好の書ならしめた。(重價二・〇五)

朝日新聞社
東京東區神田區
三橋一丁目
電話三七〇〇

保田與重郎著 (日本思想家選集) 各冊壹・五〇
芭蕉 蓮田善明著 既刊
本居宣長 近刊
肥後和男著 近刊
藤田東湖 新社

芭蕉の最も文學的な發想に即し日本
の美の思想に立脚して西洋美學によ
る芭蕉觀の一新を期した。

新潮社

新 保田與重郎著 定四・八〇二二〇
刊 南山踏雲錄 天孫祖の寺土に
林光平先生の動王
の精神を明瞭せんとする快著

重 楠公傳 中村孝也著 絶世の忠臣楠公に
材をとり思案熱烈
の眞面目な好著

十一月下旬發賣 十二月下旬發賣

小 學館
東京東區神田區
三橋一丁目
電話三七〇〇

近 代挿繪考 桂味がな東京美術社
隨筆風俗帖 大村武八著 2冊8錢
隨想繪具宮 鈴木清方著 2冊8錢

隨筆風俗帖 大村武八著 2冊8錢
隨想繪具宮 鈴木清方著 2冊8錢

隨筆風俗帖 大村武八著 2冊8錢
隨想繪具宮 鈴木清方著 2冊8錢

太閤書信 桑田忠親著 四・五〇
京都古習志 井上頼壽著 七・〇〇
小林元著 歴史眼 實價二・七〇
尊攘論 皇國學探案 價三・五〇
服裝史概説 價四・六八
仕へまつる道と生活 價二・三八

太閤書信 桑田忠親著 四・五〇
京都古習志 井上頼壽著 七・〇〇

太閤書信 桑田忠親著 四・五〇
京都古習志 井上頼壽著 七・〇〇

浮き沈み 張赫宙著 價二・七〇
多甚古村 井伏鱒二著 價一・五〇
高見順集 三代名作全集 價二・五八
新しき道義 價二・〇〇
蕉農傳 價一・〇〇
歡喜咲(糸らぎ) 價一・〇〇
長耳國漂流記 價一・〇〇

浮き沈み 張赫宙著 價二・七〇
多甚古村 井伏鱒二著 價一・五〇
高見順集 三代名作全集 價二・五八

浮き沈み 張赫宙著 價二・七〇
多甚古村 井伏鱒二著 價一・五〇
高見順集 三代名作全集 價二・五八

南國境紛争史 價五・〇〇
康熙皇帝遺訓 價五・〇〇
炭礦作業圖說 價五・〇〇
支那美術史上卷 價五・〇〇

南國境紛争史 價五・〇〇
康熙皇帝遺訓 價五・〇〇
炭礦作業圖說 價五・〇〇
支那美術史上卷 價五・〇〇

南國境紛争史 價五・〇〇
康熙皇帝遺訓 價五・〇〇
炭礦作業圖說 價五・〇〇
支那美術史上卷 價五・〇〇

東大出版 東京東區神田區
三橋一丁目
電話三七〇〇

東大出版 東京東區神田區
三橋一丁目
電話三七〇〇

東大出版 東京東區神田區
三橋一丁目
電話三七〇〇